当事者との共感を重視した福祉教育プログラムの開発

秋葉 敏夫、山﨑 きよ子、藤田 由美子、○三宮 基裕、井上 孝徳、片岡 正喜、山口 洋史、黒須 依子、スティーブン・スナイダー
九州保健福祉大学　社会福祉学部
福祉環境マネジメント学科

社会福祉専門職には、福祉当事者（障害者や高齢者、その家族や援助専門職）の視点に立った「共感」の思考が求められる。しかし、本学科のカリキュラムでは、当事者に直接接する機会が3年次の社会福祉援助技術現場実習に限定され、「共感」の思考を学ぶ福祉教育プログラムは確立されていない。本学科では、独自の取り組みとして、当事者からの講話、討議、体験、情報共有を組み合わせた当事者との共感を重視した福祉教育プログラムの開発を目指した。

キーワード：共感、福祉当事者、社会福祉、学習効果、参加型学習

１．プログラムのねらい

本プログラム開発にあたり、以下の3つの学習のねらいを設定した。

① 共感 注1の思考を身につける

事物を考える場合においては、自身の考えだけではなく、他者の意見や考えを取り入れることで自身の認識を高めることが必要である。とくに社会福祉援助の場面では当事者を理解することが援助の基本・大前提であり、優れた援助者となるためには「当事者との共感」を身に付けることが重要である。本プログラムは、学生に「共感」するという思考を繰り返し実践させ、定着させることで、今後の学習（広くは就業後も含めて）での幅広い事物の見方や考え方を養うことをねらいとする。

② 現場実習、卒業研究への動機づけ

本学科では、3年次より本格的な専門科目として、社会福祉援助技術現場実習と卒業研究の着手がある。しかし、これらの科目に取り組むための目的意識は低く、2年次までの学習が連続的に生かされてはいないようである。本プログラムは、これらの科目の前段階として、直接福祉の当事者との接触や活動を通し、今後の学習意欲の向上と実習や卒業研究への動機付けとしての役割も期待される。

③ 2年次における学習意欲の持続

本学科では1年次の基礎演習と3年次以降の専門演習の間、すなわち、2年次において教員（チューター）が個々の学生と関わる時間を設けていない。そのため一部の学生について、欠席数の増加や学習意欲の低下がみられる。2年次後期に学生参加型の活動的な科目を設定することで、改めて学習の目標を発見させる。

２．方法

本プログラムは、講話・グループ討議と体験学習の二種類の学習形態で構成している。

①当事者からの講話とグループ討議

当事者をゲストとして迎えて講話を聴講し、座学では学び得ない現実の問題を感じ取り、さらにグループ討議を通して自身の問題意識を具体化させる。

②福祉施設での体験学習

講話から得られた問題意識を持って福祉施設での体験実習に臨ませ、終了後に経験した事柄についてまとめ、相互に情報の共有化を図る。

いずれの学習形態においても、学んだ内容についての発表の機会を設けることで、プレゼンテーションの技術の習得も目指している。

学習効果の測定として、プログラム前後に福祉学習への意欲に関する質問紙調査を行う。さらに、これらの経験がその後の社会福祉援助技術現場実習や卒業研究あるいは就職活動にどのような影響を与えたかについてのフォロー調査を1年後に実施し、効果を検証する。

３．プログラムの概要（平成18年度）

１）実施規模

参加学生数42名（平成17年度入学生）
教員数10名
講話者4名　　体験学習施設のべ9施設

２）講話の概要

（１）講話者

第１回：精神障害者通所授産施設（小規模作業所）利用者および同施設長
第２回：身体障害を持たれている方ご自身
第３回：知的障害を持たれている方のご家族（保護者）
第４回：障害を持たれている高齢者ご自身とその介護者（配偶者）

（２）講話の内容

①これまでの生活史：生活のなかで何が困難となり、どうやって克服したか。その時々の心境の変化

②家族等との関わり：困難に直面したとき、家族等はどのように関わったのか

③福祉専門職等との関わり：困難に対して、どういった専門職の方が関わり、支援をしてくれたのか

３）体験学習の概要

（１）体験施設の種別

特別養護老人ホーム
高齢者デイサービスセンター
身体障害者療護施設
知的障害者授産施設
精神障害者通所授産施設（小規模作業所）

（２）学習内容

利用者と直接コミュニケーションが取れるような活動を通して、「共感」の思考を学ぶ

（３）体験学習の時間

おおむね９時から 17 時の１日間

４）アンケート調査の項目

・取得希望資格
・学習活動および将来に関する意識 注2
・学習が役に立った点（最終回のみ）
・改善すべき点（最終回のみ）
・プログラムの継続（最終回のみ）

４．プログラムの展開

１）講話による学びの時間の進め方

事前準備として、講話者に対しあらかじめ上記の講話内容を盛り込んだ講話を依頼する。

【１日目】

・聴講内容を所定の用紙にメモする（30 分）
・講話者は一旦休憩し、その間にグループ 注3 で 1～2 問程度の質問を考える（15 分）
・講話者と質疑応答する（15 分）
・聴講メモを活用してグループで意見交換を行い、意見をまとめる（20 分）
・まとめた意見を整理し、次回の発表用資料（OHP）を作成する（10 分）
・自宅学習として聴講記録を作成する

【２日目】

・グループ討議の結果についてのプレゼンテーションを行う（各班 15 分）
・評価シートにより発表に対する評価を行う
・評価結果を集計し、フィードバックを行う。

２）体験学習による学びの進め方

事前準備として、体験する施設の希望を調整する。決定した施設の概要（目的、役割、利用者の特徴など）をまとめ、事前学習を深める。

【体験学習】

・所定の期日に体験学習を行う
・体験した内容を各グループでまとめ、その内容を模造紙に整理し、発表資料を作成する
・体験学習の結果のプレゼンテーションを行う
・評価シートにより発表に対する評価を行う

３）教員の関わり方

【講話による学びの時間】

・各回３名の教員が学習活動に参加し、討議が円滑に進むようなアドバイスを与え、また、発表に対する講評を行う
・チューター担当学生の作成した聴講記録に目を通し、検印する

【体験学習による学びの時間】

・各教員、おおむね１施設の巡回訪問を行い学習の状況を確認する
・体験学習の発表会には、全教員が出席し、各グループの発表に対して質問・講評を行う

５．結果と考察

本プログラムの効果を検討するため「学習活動および将来に関する意識」に関する質問紙調査項目について平均点を算出し、t 検定を行った（図１）。

その結果、1 項目を除くすべての項目で平均点が上昇し、とりわけ『Q3 討議や発表の場で自分の意見を出せる』『Q4 討議や発表の場で他の人の意見を受け止める』において 1%水準で有意な差が認められ、本プログラムが討議や発表の機会として有効であることが示された。また『Q7 教員と将来の仕事・進路などについて話をする』においても平均点としては低いが有

意な差が認められ、学生と教員の関わり方にも効果を与えていることが分かる。

一方で、『Q10 将来、福祉職に就きたいと思っている』では、プログラム前に比べて平均点が低下した。このことにより、直接福祉の現場を見聞したことが進路を考えるきっかけとなったことが推察される。

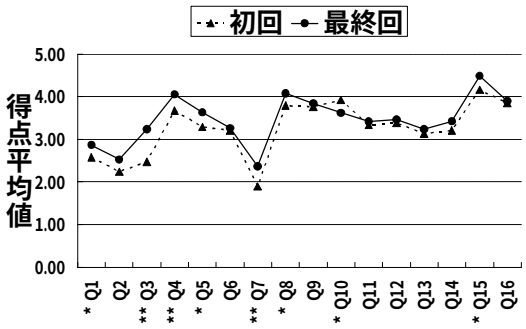

図１　学習活動および将来に関する意識

図２には、本プログラムによる学習が役に立った点についての回答を示した。

その結果、全体的に役に立ったとする意見が多く、とくに『直接、当事者の話が聞けたこと』と『施設での体験学習ができたこと』については、7 割が“大変役に立った”と回答し、参加型学習の効果が高いことがうかがえる。

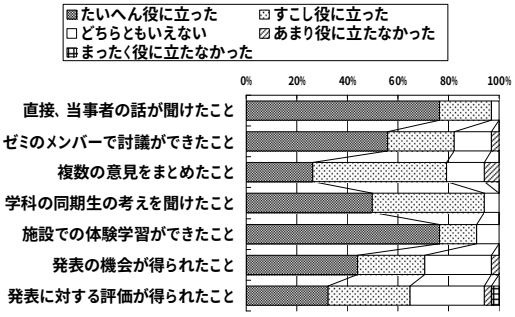

図２　学習が役に立った点

６．結論

以上の結果より、本プログラムは、①討議や発表の機会として、②将来展望の冷静・客観的見直しの機会として有効であると考えられる。これまでテキストを基本とした座学中心の学習とは異なり、本プログラムは、相互の意見交換により他者の意見を聴く力を養い、自身の考えを他者に伝える技術の学習の機会としての意義がある。また、講話や体験学習を通して当事者と接することで、これまで漠然と捉えてきた福祉の現場に関する具体的な将来へのイメージにつながり、今後の学習の展開に効果を与えることが期待される。

今後は、プログラム後の現場実習・卒業研究・卒業後の進路選択への動機付けとの関連分析を進め、その効果を検証する予定である。

注

１ 共感とは、クライエント（相手）の立場に自分を重ね合わせながら、クライエントの思考、感情、体験を援助者（自身）の認識の枠組みのなかに取り込んでいくこととした。

２ 調査の項目は、以下のとおり

Q1 福祉に関連する新聞記事や書籍を読む
Q2 ボランティア活動や施設訪問などをする
Q3 討議や発表の場で自分の意見を出せる
Q4 討議や発表の場で他の人の意見を受け止める
Q5 ゼミや講義で出された意見や本などの考えの中から新しい発見ができる
Q6 クラブ・サークル等、学内の活動をしている
Q7 教員と将来の仕事・進路などについて話をする
Q8 友人と将来の仕事・進路などについて話をする
Q9 家の人と将来の仕事・進路などについて話をする
Q10 将来、福祉職に就きたいと思っている
Q11 マネジメント学科２年生同士や先生方との交流が持てている
Q12 福祉の当事者（本人や家族）が抱える問題は、自分自身（あなた）の問題であると思う
Q13 これまでの学習において、自分自身の課題を持って取り組んでいる
Q14 福祉を学んでいくに当たっての心構えがある
Q15 人と人とのつながりの大切さを認識している
Q16 これからも福祉を深めるための学習ができると思う

３ グループは 1 年次の基礎演習のメンバーで構成した。

謝辞

本プログラムは、私立大学教育研究高度化推進特別補助により平成 16 年より 5 年計画で実施している。

ご講話いただいた皆様、体験学習を受け入れていただいた施設の方々に深謝いたします。